

# 沖代地区条里跡 45 次調査

大分県中津市大字永添における集合住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2018

中津市教育委員会

## 例 言

- 1 本書は、宅地造成工事に伴い、大分県中津市大字永添で平成29年度に実施した、沖代地区条里跡45次調査の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 調査は、平成29年5月8日に有限会社太平商会と中津市が埋蔵文化財発掘調査の委託契約を結び、5月15日から中津市教育委員会が実施した。
- 3 遺構の実測図作成は、調査担当者の末永弥義のほか衛藤美紀・中坂真基子・村上由美子が行った。また、遺構の写真は末永が撮影した。
- 4 出土遺物の整理作業は、岩男純子・岩崎弘子・久原彩・土橋厚子が担当した。
- 5 遺物の実測・製図・写真撮影は末永が行った。
- 6 本書で使用した座標は、世界測地系による。
- 7 本書に掲載した「第1図 沖代地区条里跡周辺主要遺跡等分布図」は、国土地理院発行の1/50,000「中津」・「宇佐」を改変したものである。
- 8 今回の調査で出土した遺物及び検出した遺構の図面・写真等の記録は、中津市歴史民俗資料館に保管している。
- 9 本書の執筆・編集は末永が行った。

## 本文目次

第1章 調査の経過と組織	1
第1節 調査の経過	1
第2節 調査の組織	1
第2章 遺跡の地理的・歴史的環境	2
第1節 地理的環境	2
第2節 歴史的環境	2
第3章 調査の内容	5
第1節 南区の調査	5
1 溝	5
2 土坑	12
3 その他の遺構	12
第2節 北区の調査	13
1 溝	13
2 その他の遺構	13
第4章 調査のまとめ	15

## 挿図目次

第1図	沖代地区条里跡周辺主要遺跡等分布図 (縮尺1/50,000)	3
第2図	沖代地区条里跡45次調査位置図 (縮尺1/4,000)	4
第3図	沖代地区条里跡45次調査全体図 (縮尺1/100)	5
第4図	沖代地区条里跡45次調査南区全体図 (縮尺1/60)	6
第5図	1号溝実測図 (縮尺1/40)	7
第6図	2号・3号溝実測図 (縮尺1/40)	8
第7図	2号～4号・8号溝土層断面図 (縮尺1/40)	9
第8図	南区出土遺物実測図 (縮尺1/3)	9
第9図	4号溝実測図 (縮尺1/40)	10
第10図	5号溝実測図 (縮尺1/40)	11
第11図	1号土坑実測図 (縮尺1/40)	12
第12図	沖代地区条里跡45次調査北区全体図 (縮尺1/60)	13
第13図	北区南壁土層断面図 (縮尺1/40)	13

## 図版目次

図版1	(1) 沖代地区条里跡45次調査前全景 (北から)	
	(2) 沖代地区条里跡45次調査南区全景 (北から)	
図版2	(1) 南区全景 (東から)	(2) 南区北半 (西から)
	(3) 南区北半 (東から)	
図版3	(1) 1号溝 (西から)	(2) 1号溝土層断面 (西から)
	(3) 1号溝木製杭出土状況	(4) 1号溝木質出土状況
図版4	(1) 2号溝・3号溝 (東から)	(2) 2号溝・3号溝 (西から)
	(3) 2号溝東部 (南から)	
図版5	(1) 4号溝 (南東から)	(2) 5号溝 (南から)
	(3) 2号溝～4号溝土層断面 (西から)	(4) 5号溝土層断面 (南から)
図版6	(1) 南区南半 (西から)	(2) 1号土坑 (南から)
	(3) 1号土坑土層断面 (東から)	
図版7	(1) 北区全景 (西から)	(2) 北区全景 (南から)
	(3) 北区南壁土層断面 (北から)	
図版8	(1) 1号溝出土土器	(2) 1号溝出土木製杭
	(3) 2号溝出土土器	(4) 3号溝・5号溝出土土器
	(5) 4号溝出土土器	

## 第1章 調査の経過と組織

### 第1節 調査の経過

沖代地区条里跡は中津平野の広範囲にまたがる古代の条里跡である。この遺跡の南部にあたる中津市大字永添229番2地で平成28年9月28日に埋蔵文化財包蔵地の照会が提出された。事業対象地の現況は水田で、照会があった事業は集合住宅建設を実施するもので、建物建築部分は掘削工事を伴うものであった。このため、中津市教育委員会は文化財保護法第93条第1項の届出が必要である旨の指導を行った。届出は平成29年2月21日に提出され、4月4日に確認調査を実施した。調査の結果、多数の溝と土坑が確認されたことから、教育委員会は工事主体者と遺跡の記録保存についての協議を行い、5月8日付で埋蔵文化財発掘調査委託契約を締結した。事業地における発掘調査は平成29年5月15日から6月16日までとし、発掘調査報告書の作成業務は6月19日から平成30年3月31日までとした。

現地における発掘調査は5月15日に開始し、設定した調査区は建物建築部分（南区、95㎡）と浄化槽設置部分（北区、9㎡）の2か所である。調査ではまず重機により基盤層の上に堆積する耕作土・床土等を深さ30～90cmにわたって掘削し、その後人力によって遺構の検出・掘削を行った。発掘調査は5月30日に終了した。その後、出土品の整理作業を経て報告書作成作業を実施した。

### 第2節 調査の組織

今回の沖代地区条里跡45次発掘調査に伴う事業執行の組織は次のとおりである。

調査主体 中津市教育委員会

教育長	廣畑 功
調査事務 社会教育課長	高尾 良香
社会教育課文化財室長	高崎 章子
社会教育課管理・文化振興係主幹	大森 健
社会教育課管理・文化振興係主幹	磯貝 奏
社会教育課管理・文化振興係係員	湊 恵
社会教育課管理・文化振興係係員	陽 麻里奈
社会教育課管理・文化振興係係員	渡邊奈津子
社会教育課文化財係主幹	花崎 徹
社会教育課文化財係副主任研究員	浦井 直幸
社会教育課文化財係主事	衛藤 美紀
調査担当 社会教育課文化財係嘱託	末永 弥義

また、発掘調査作業に従事した作業員は次のとおりである。

猪迫 孝利・今木 功一・金崎ミチ子・祐成 本文・高榎 裕美・中上 好孝・中坂真基子・松本 和彦・村尾 繁樹・村上由美子

## 第2章 遺跡の地理的・歴史的環境

### 第1節 地理的環境

大分県中津市は県の北部に位置し、面積は491km<sup>2</sup>に及ぶ。四至は北方が瀬戸内海西端の周防灘に開け、西が福岡県に、東が宇佐市に、南は玖珠町と日田市に接している。市の西部を北流する一級河川山国川は英彦山（標高約1,200m）を源とし、下流域では福岡県との県境をなすとともに広い沖積平野「沖代平野」を形成する。上流域は山稜が複雑に延び、その中央部を占める国指定の名勝耶馬溪は沿岸約50kmに展開する。その地質は安山岩質集塊岩の上に熔岩がかぶさる構造で、特に集塊岩は奇観を呈している。耶馬溪は頼山陽の命名によるもので、一帯は耶馬日田英彦山国定公園の一部となっている。また、市の東部には大丸川が北東に流れるが、沖代平野と大丸川の間には標高10m～30m程度の洪積台地「下毛原台地」が広がっている。

### 第2節 歴史的環境

市内には旧石器時代以降の遺跡が数多く分布し、その一部は発掘調査されている（第1図参照）。

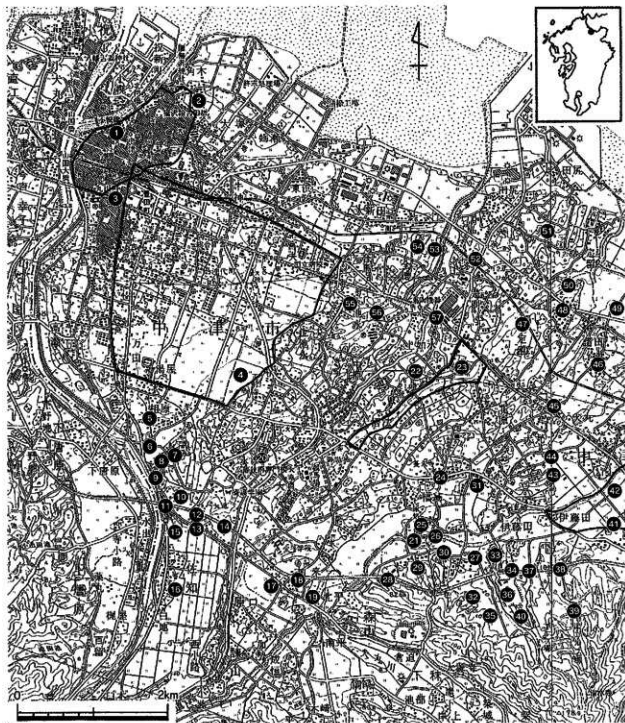
**旧石器時代** 旧石器時代の遺跡はまだ少ないが、諸田南遺跡（45）で尖頭器やナイフ形石器が出土している他に、才木遺跡（35）・法垣遺跡（19）などでも石器が出土している。

**縄文時代** 縄文時代になると、上畑成遺跡（44）で早期の無文土器が出土し、早期末から前期の黒水遺跡（18）では陥し穴が発見されている。後期・晩期に属する植野貝塚では牙裂垂飾具・貝輪などの装身具や魚類・動物の骨などが出土し、高畑遺跡では土偶も発見されている。集落跡では古田遺跡が調査されているが、法垣遺跡は竪穴住居跡以外にも掘立柱建物跡が検出された重要な遺跡である。

**弥生時代** 弥生時代になると山国川や大丸川流域の沖積平野で水稲耕作が拡大していったと考えられる。前期後葉から中期初頭の上ノ原平原遺跡（13）や諸田遺跡（46）で貯蔵穴が発掘されている。中期では福島遺跡（25）で住居跡とともに二列埋葬の土壙墓群が確認されている。また、森山遺跡（28）では前期末から後期初頭の集落全域が把握されている。

**古墳時代** 古墳時代では集落や生産遺跡・墳墓などの各種の遺跡が確認されている。集落関係では後期に属する中須遺跡・十前垣遺跡・諸田遺跡・定留遺跡（48）などが調査されている。これらのうち十前垣遺跡では移動式カマドが出土し、諸田遺跡ではL字カマドを有する住居跡や幅の羽口が発見され、渡来人の系譜に属する人々の存在が推測されている。須恵器を生産した城山窯跡群（36）や草場窯跡（37）・踊ヶ迫窯跡（38）・ホヤ池窯跡（39）・大谷窯跡（40）などからなる野依伊藤田窯跡群は大丸川中流の丘陵地帯に位置し、一部は奈良時代まで継続している。古墳では下毛原台地北部の亀山古墳（55）以外の多くの墳墓は台地の南西部に営まれている。5世紀中ごろには山国川に面する勘助野地遺跡（12）で方形周溝墓が築造され、5世紀後半から7世紀前半には上ノ原横穴墓群（11）が造営される。また、三保地域には後期になると岩井崎横穴墓群（29）・城山古墳群（34）・城山横穴墓群（33）などが築造される。7世紀から9世紀の相原山首遺跡（7）では方墳が作られている。

**白鳳～平安時代** 7世紀末の白鳳期に創建された相原廃寺（5）は沖代平野の南端部に位置するが、その北方約500mを隔てて西北西～東南東方向に官道「勅使街道」が整備される。沖代地区条里跡（4）はこの官道を南限として8世紀初頭には沖代平野の広範囲に施行されている。古代の下毛郡衙の正倉



第1図 沖代地区糸里跡周辺主要遺跡等分布図 (縮尺1/50,000)

- |              |              |             |              |             |
|--------------|--------------|-------------|--------------|-------------|
| 1. 中津城       | 13. 上ノ原平原遺跡  | 25. 福島遺跡    | 37. 草場窯跡     | 49. 天日川遺跡   |
| 2. 中津城下町遺跡   | 14. 大池南遺跡    | 26. 福島地下式横穴 | 38. 睡ヶ迫窯跡    | 50. 和岡貝塚    |
| 3. 豊田小学校校底遺跡 | 15. 住知久保畑遺跡  | 27. 前田遺跡    | 39. ホヤ池窯跡    | 51. 山沢大迫遺跡  |
| 4. 沖代地区糸里跡   | 16. 住知遺跡     | 28. 森山遺跡    | 40. 大谷窯跡     | 52. 是州遺跡    |
| 5. 相原廃寺      | 17. 横瀬遺跡     | 29. 岩井崎横穴墓群 | 41. 野依遺跡     | 53. 全徳遺跡    |
| 6. 二口遺跡      | 18. 黒水遺跡     | 30. 犬丸川流域遺跡 | 42. 野依地区区条甲跡 | 54. カラスノ遺跡  |
| 7. 相原山首遺跡    | 19. 法垣遺跡     | 31. 畑中遺跡    | 43. 野田遺跡     | 55. 亀山古墳    |
| 8. 鶴市神社裏山古墳  | 20. 長者屋敷官衙遺跡 | 32. 安平遺跡    | 44. 上畑成遺跡    | 56. 石家池遺跡   |
| 9. 坂手隈横穴墓群   | 21. ボウガキ遺跡   | 33. 城山横穴墓群  | 45. 蒲田南遺跡    | 57. 舞手川流域遺跡 |
| 10. 弊飯邸古墳    | 22. 大智法地区糸里跡 | 34. 城山古墳群   | 46. 蒲田遺跡     |             |
| 11. 上ノ原横穴墓群  | 23. 原遺跡      | 35. 才木遺跡    | 47. 定留貝塚     |             |
| 12. 脇助野地遺跡   | 24. 田丸城跡     | 36. 城山窯跡群   | 48. 定留遺跡     |             |

跡である長者屋敷官衙遺跡（20）も8世紀後半に官道の南側に建設されている。集落では三口遺跡（6）で10世紀代の緑釉陶器や墨書土器が出土している。

**中世** 中世の遺跡としては権野古城遺跡・諸田遺跡・中尾城跡・犬丸城跡などがあるが、諸田遺跡では堀に囲まれた居館跡が調査され、中尾城跡では土塁が現存する。犬丸城跡は犬丸氏の居城で、黒川官兵衛の豊前入国に従わず一揆に加わり、黒田氏に攻め落とされる。16世紀末には黒田氏が入部して中津城（1）が築造されるが、石垣に高度な構築技法が採用された九州最古の近世城郭とされている。**近世以降** 1600年関ヶ原の合戦の後、黒田氏に替わって細川氏が入部し、城と城下町（2）が整備・拡張されていく。城下の造営は小笠原氏が入部する1632年に完成する。その後1717年に奥平氏が入部し、1871年の廃藩置県まで奥平氏が城下を統治した。

#### 沖代地区桑里跡45次調査地の周辺遺跡

今回調査地の周辺ではこれまでにもたびたび発掘調査が実施されている（第2図参照）。

北方約50mに隣接する沖代地区桑里跡41次調査では古墳時代以前の東西大溝が調査され、西方約600mの五唯地区では古墳時代の掘立柱建物跡1棟・土坑4基と中世の土坑1基が調査されている。また、南西約300mの居屋敷地区では6世紀後半代の竪穴住居跡が、南方約250mの市木地区でも6世紀後半代の水田祭祀跡が確認されている。さらに、南西約250mの鶴居小学校周辺の市場遺跡でも1次～4次調査で、古墳時代の竪穴住居跡のほか中世にかけての土坑や溝が発掘されている。



第2図 沖代地区桑里跡45次調査位置図（縮尺1/4,000）

### 第3章 調査の内容

#### 第1節 南区の調査

南区は事業対象地の南部で建物の建築部分に設定した調査区で、南北11.2m・東西8.5mの長方形の平面形を呈する（第4図）。

南区の基本的な上層は、上位から耕作土（黒色砂質土）が深さ30cm、床上（暗茶褐色弱粘質土）が深さ20cmで、その下層は基盤層（明灰色粘質土）となる。

遺構検出面の標高は10.9mから10.1mで、検出された主な遺構は、溝8条・杭列1条・土坑1基であるが、ピットも十数基検出されている。

#### 1 溝

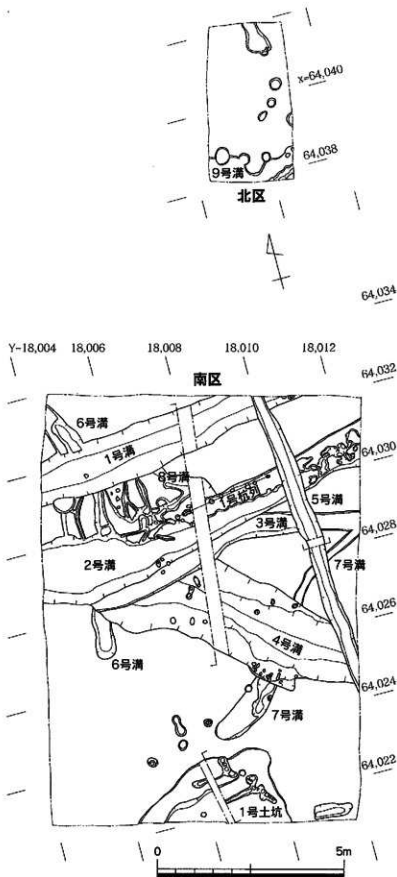
溝は調査区の北部から中央部にかけて分布し、複雑に切り合い、かつ様々な方位を指向するものが検出された。これらの溝の大部分は調査区外まで延び、その幅には広狭があった。

#### 1号溝（第5図）

1号溝は調査区の北端部に位置し、東西方向に直線的に走る溝で、東西両方向とも調査区外まで延びている。

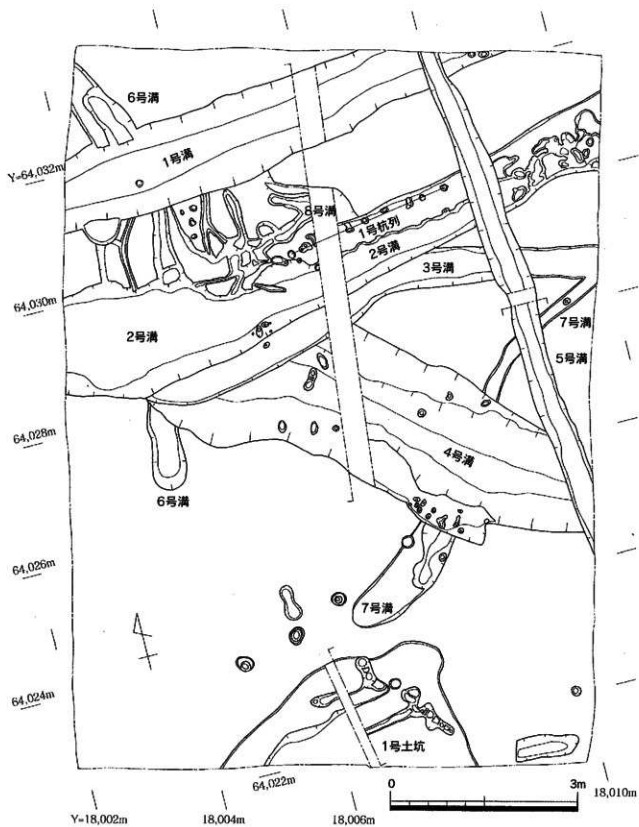
他の遺構との切り合いは、西側で6号溝、中央部で8号溝を切り、北側では5号溝に切られている。

遺構の規模は、検出した範囲で長さが7.56m、幅が東部の狭い部分で0.97m、中央部の広い部分で



第3図 沖代地区糸里跡45次調査全体図（縮尺1/100）





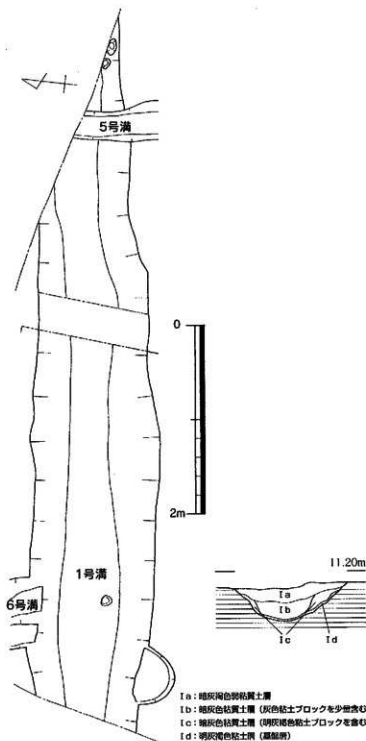
第4图 冲代地区糸里跡45次調査南区全体图 (縮尺1/60)

1.35mである。深さは最深部で0.37mをはかる。断面の形状はやや深い皿状を呈し、床面の標高は東端部が10.62mであるのに対し、西端部は10.65mとわずかに高くなっている。主軸の方位はN-83°-Eである。

#### 出土遺物 (第8図)

1号溝からは弥生土器や須恵器などの土器の他に木製の杭が出土している。

1・2は弥生土器で、1は壺の体部上位の破片で、体部の上半部が球形を呈する器形である。2は壺の口縁部または高坏の脚部かと考えられる小片で、先端部が如意状に開き、器壁がしだいに薄くなっている。3・4は須恵器で、3は高坏の坏部または蓋の口縁部の小片である。4は坏蓋の口縁部の小片で、器面の調整はヨコナデである。14・15は床面付近から出土した木製の杭の先端部の破片である。14は残存長11.2cm・幅2.4cm・厚さ1.4cmで、先端部は四面とも幅・厚さを小さくして尖らせるように、工具による加工痕がみられる。15は木目に沿って剥離した残存長11.0cmの小片で、先端部にはナイフ状の工具による加工痕が残る。



第5図 1号溝実測図 (縮尺1/40)

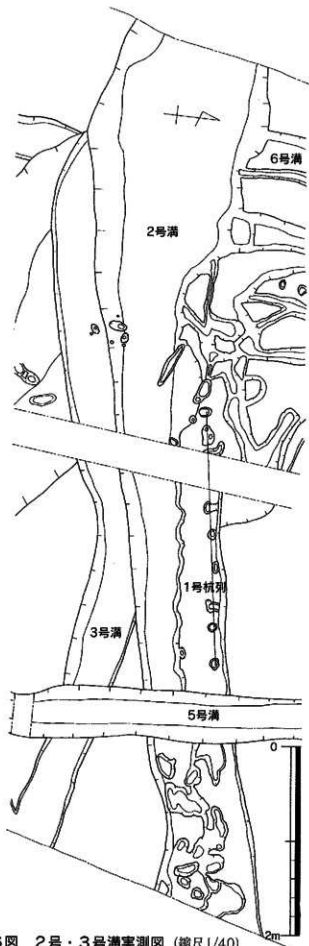
#### 2号溝 (第6図・第7図)

2号溝は調査区の北部で、1号と並行するように東西方向に直線的に走る溝で、東西両方向とも調査区外まで延びている。

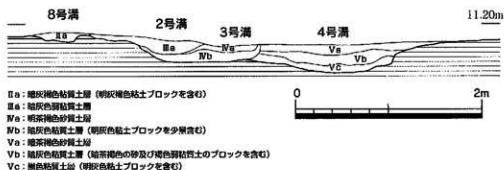
他の遺構との切り合いは、西側で6号溝・8号溝を切り、中央部で3号溝と合流するように切り、北側では5号溝に切られている。

遺構の規模は、検出した範囲で長さが9.10m、幅が東部の狭い部分で0.85m、中央部の広い部分で1.72mである。深さは最深部で0.37mをはかる。断面の形状は浅い皿状を呈し、床面の標高は東端部が10.93mであるのに対し、西端部は10.65mと低くなっている。ただし、東部の床面には凹凸が広く見られる。2号溝の主軸の方位はN-81°-Eである。

なお、2号溝の中央部付近の北側壁面に沿って1号杭列が検出されたが、この遺構は8本の小ピット



第6図 2号・3号溝実測図 (縮尺1/40)



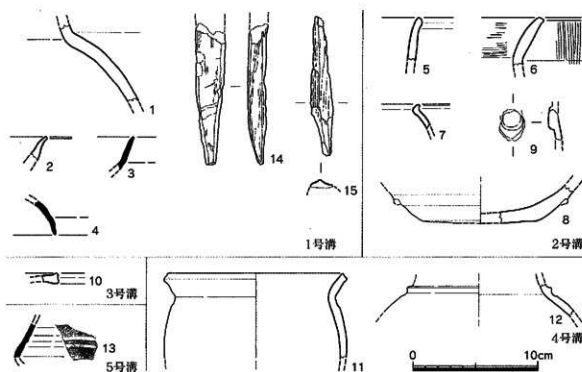
第7図 2号～4号・8号溝土層断面図 (縮尺1/40)

がほぼ東西一列に並ぶ状況で確認されたものである。遺構の全長は2.70mで、各ピットの直径は0.10m前後で、間隔は芯々間で0.27m～0.42mである。この枕列はその位置関係からみて2号溝に付属する遺構と考えられる。

### 出土遺物 (第8図)

2号溝からは弥生土器と土師器が出土している。また、西部では棒状を呈する木質が数点出土しているが、これらは脆く、人工的な遺物であるかどうかの判断はできなかった。

5・7・8は弥生土器で、5は長頸甕の口縁部の小片である。頸部上位から口縁部に向かってほぼ直立し、端部の外面はわずかに器壁を厚くしている。7は器種が不明の口縁部の小片で、内傾して立ち上がったのち端部を外上方に短くつまみ上げている。8は壺の底部の破片で、下端部近くに突帯をめぐらせた痕跡がある。底部はほぼ平底である。6は土師器の甕の口縁部の小片である。口縁部が外上方に直線的に立ち上がり、外面に縦方向、内面に横方向のハケによる器面調整を施す。9は弥生土器の可能性のある器種不明の土器片である。外面に直径1.7cmの円形で扁平な突起を貼り付けている。



第8図 南区出土遺物実測図 (縮尺1/3)

### 3号溝 (第6図・第7図)

3号溝は調査区のやや北部に位置し、東西方向に走る溝で、2号溝と合流する部分から西側では南側に幅を広げている。

他の遺構との切り合い関係は、2号溝と5号溝に切られ、4号溝と6号溝を切っている。

遺構の規模は検出した全長が7.55m、幅は中央部付近で0.61mである。深さは東端部では浅く遺構検出面から0.07mの標高10.96m、西端部では遺構検出面から0.31mと深く標高10.57mである。断面の形状は浅い皿状を呈し、底部には暗灰色の砂質土が堆積していた。主軸の方位は東半部ではN-77°-Wである。

#### 出土遺物 (第8図)

3号溝からは弥生土器が少量出土している。

10は甕の口縁部の小片で、端部に向かってほぼ水平に開き、端部は器壁をやや厚くして、上面を上方にわずかにつまみあげる。

### 4号溝 (第9図・第7図)

4号溝は調査区の中央部に位置し、北西-南東方向に走るやや大型の溝である。調査区の東部では調査区外に延びるが、西側は不明である。

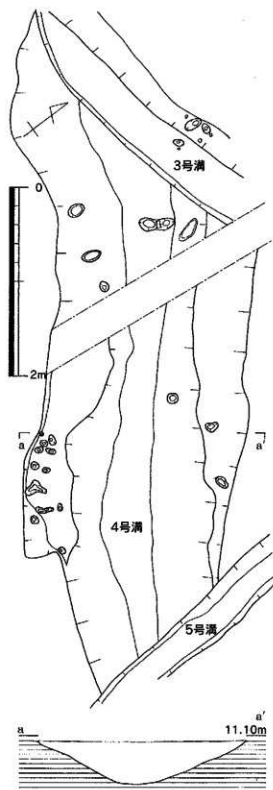
他の遺構との切り合い関係は、3号溝と5号溝に切られ、6号溝と7号溝を切っている。

検出した遺構の全長は7.37mで、幅は東端部で1.60m、西端部では2.14mをはかる。深さは東端部で0.34m、西端部で0.38mで、標高は東端部・西端部ともに10.61mである。断面の形状は全体としては皿状を呈するが、両側面とも中位で傾斜度がやや急になっている。この溝の底部にも3号溝と同様の暗灰色の砂質土が堆積していた。また、壁の両側面とも一部で小ピットが検出されたが、これらは4号溝に伴う遺構かどうか不明である。4号溝の主軸の方位はN-55°-Wである。

#### 出土遺物 (第8図)

4号溝からは弥生土器と安山岩の剥片が出土している。

11・12は弥生土器で、11は甕の口縁部から体部中位にかけての破片である。口縁部径約14.6cmの



第9図 4号溝実測図 (縮尺1/40)

小型の器形で、口縁部が「く」の字状に外反し、体部は中位付近に張りをもつ。体部外面の器面調整はクテハケを施したのちなデで消している。12は壺の体部上位の破片で、やや小型の器形である。頸部と体部の境に断面三角形の突帯を1条めぐらしている。

#### 5号溝 (第10図)

5号溝は調査区の東部に位置し、南北方向に直線的に走る溝で、南北両方向とも調査区外まで延びている。

他の遺構との切り合い関係は、1号溝～4号溝と7号溝などの重なり合うすべての溝を切っている。

検出した遺構の全長は8.32mで、幅は0.45mから0.55mで一定している。深さは全体的に0.30mで、床面の標高は北端部で10.67m、南端部で10.74mである。断面の形状はU字状をなす。主軸の方位はN-5°-Wである。

#### 出土遺物 (第8図)

5号溝からは弥生上器の他に須恵器が出土している。

13は須恵器の壺またはハソウの頸部の小片である。外上方に直線的に開く残存部分の上端に縞波状文をめぐらし、その下位に断面三角形の低い突帯を削り出している。

#### 6号溝 (第4図)

6号溝は調査区の西部に位置する南北方向の溝で、北部は北西方向にやや屈曲し、調査区外まで延びている。

他の遺構との切り合い関係は、1号溝～4号溝のすべてに切られている。

検出した遺構の全長は6.92mで、幅は最も広い部分で0.73mである。深さは最も深い部分で遺構検出面から0.19mである。床面の標高は北端部で10.88m、南端部で10.77mである。主軸の方位はN-12°-Eである。

#### 出土遺物

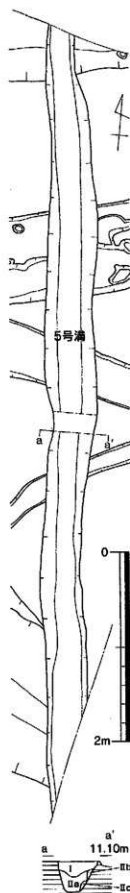
6号溝からは遺物が出土していない。

#### 7号溝 (第4図)

7号溝は調査区中央部のやや東側で、北東-南西方向にやや蛇行しながら走る溝で、北側は調査区外まで延びている。

他の遺構との切り合い関係は、4号溝・5号溝に切られている。

検出した遺構の全長は6.63mで、幅は最も広い南部で0.72mであるが、北部では0.22mと狭くなっている。深さは遺構検出面から0.06mと浅い。床面の標高は北端部で10.97m、南端部で10.95mと大きな差はない。主軸の方位は全体としてはN-48°-Eである。



I : 暗灰色粘質土層 (灰褐色粘土のブロックを含む)  
 IIa : 暗灰色粘質土層  
 IIb : 暗灰色粘質土層 (褐色粘土のブロックを含む)  
 IIc : 暗灰色粘質土層 (灰色粘土のブロックを含む)

第10図 5号溝実測図  
(縮尺1/40)

## 出土遺物

7号溝からは遺物が出土していない。

## 8号溝 (第4図・第7図)

8号溝は調査区北部の中央部付近に位置する遺構で、1号溝・2号溝・6号溝で囲まれた内側に複数の小溝が複雑に交差する集合体として存在し、全体としては土坑状と位置付けることもできる遺構である。

他の遺構との切り合い関係は、1号溝・2号溝に切られている。

遺構全体の規模は東西2.95m・南北1.40mである。当遺構の基本的な構造は、西側には南北方向に走る小溝があり、この小溝が南半で2条に枝分かれしている。また、中央部付近には南北方向の小溝が走り、東側には東西方向に走る小溝がある。これらの小溝はすべて幅が0.15mから0.20m程度で、深さも0.05m前後と浅い。

## 出土遺物

8号溝からは弥生土器の壺または甕が出土しているが、小片のため図示していない。

## 2 土坑

土坑は調査区の南端部で1基のみ検出された。

### 1号土坑 (第11図)

1号土坑は調査区の南側にさらに延びているが、検出した部分ではやや方形に近いような平面形を呈する。他の遺構との切り合いはない。

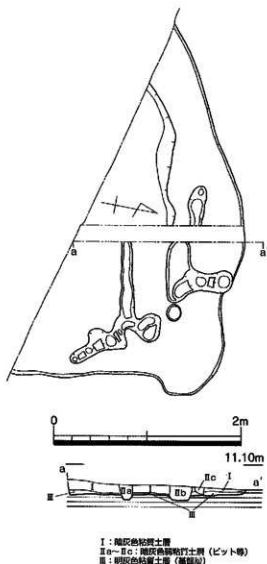
今回調査した部分は遺構全体の北東部に相当する一面である。検出した平面規模は東西3.73m・南北2.43mで、深さは最深部で0.09mと浅い。遺構の内部には小さい溝状遺構やピットがあり、北辺に沿って床面より高い平坦面も存在する。この平坦面は遺構の北東隅部が途切れているが、全長2.64m分が確認され、幅は最も広い部分で0.72mである。床面からの高さは0.05m前後である。遺構内のピットは直径が小さく、深さも浅いことから、柱穴とは考えられない。当遺構の主軸の方位はN-78°-Eである。

## 出土遺物

1号土坑からは遺物が出土していない。

## 3 その他の遺構

その他の遺構として特筆するべきものはないが、上記の遺構外で検出された遺構としてはピットがある(第4図)。ピットは1号土坑の北側の調査区南部に



第11図 1号土坑実測図 (縮尺1/40)

5基集中するが、規則性に乏しく、遺物も出土していないので、遺構の性格は不明である。

## 第2節 北区の調査

北区は事業対象地の中央部付近で浄化槽の設置予定地に設定した調査区で、南区の北方約5.6mに位置する。調査区の平面形は南北4.2m・東西2.3mの長方形を呈す(第12図)。

北区の基本的な土層は、南区と同様であるが、遺構検出面の深さは0.50m前後と、南区に比べてやや浅く、標高は11.0m程度である。検出した遺構は溝1条とピット数基だけである。

### 1 溝

#### 9号溝(第12図)

9号溝は調査区の南辺に沿って東西方向に走る遺構で、東西両方向とも調査区外まで延びている。

検出した遺構の全長は2.3mで、幅は南側の調査区外にまで及んでいるので不明であるが、0.67m以上である。深さは最深部で0.13mとやや浅く、断面の形状は皿状を呈する。遺構内の東部にはやや斜行する方向に幅0.25m前後・深さ0.05mの小溝が走っている。9号溝の主軸の方位はN-77°-Wである。

#### 出土遺物

9号溝からは遺物が出土していない。

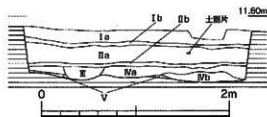
### 2 その他の遺構

その他の遺構としては調査区の北端部に土坑状の遺構が1基あり、中央部から南部にピットが数基ある。これらのピットには規則的な配置が見られないが、内部から弥生土器や須恵器の小片が出土している。

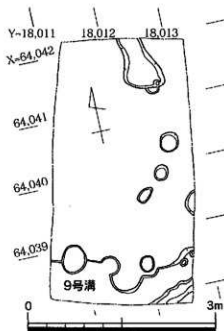
#### 水田関連遺構(第13図)

沖代地区条里跡はその遺跡の名称が示す通り、古代以降に区画整備された水田の跡である。今回の調査では平面的にその区割りや水路跡などの確実な遺構は確認されなかったが、北区の調査区の南壁の土層観察により現在の水田面の下層に古いもう1面の水田面が検出された。

現在の水田は厚さ約0.15mの耕作土(Ia層)と、厚さ約0.04mの床土(Ib層)とで構成されているが、その下層に厚さ約0.18mの耕作土(IIa層)と厚さ約0.04mの床土(IIb層)が存在している。このIIa層中からは土器の小片が出土しているが、時期は不明である。



第13図 北区南壁土層断面図(縮尺1/40)



第12図 沖代地区条里跡45次調査  
北区全体図(縮尺1/60)

- Ia: 暗灰色粘質黄土層
- Ib: 暗灰色粘質黄土層(暗褐色のブロックを多く含む)
- IIa: 暗灰色粘質黄土層(褐色のブロックをわずかに含む)
- IIb: 暗灰色粘質黄土層(暗褐色のブロックをやや多く含む)
- Ⅲ: 褐色粘質土層
- Ⅳa: 暗灰色粘質土層(灰白色・褐色のブロックを含む)
- Ⅳb: 暗灰色粘質土層(灰白色・褐色のブロックを多く含む)
- V: 明褐色粘質土層(基盤層)



第1表 沖代地区条里跡45次調査出土遺物観察表

出土遺構	挿図 番号	器種 (残存状況)	流量(cm)		色調・胎土・装成			成形・修整・技法		備考
			①器高 ②口径 ③その他	④器径	色調	胎土	装成	外:外面 内:内面		
1号溝	8-1	弥生土器・壺 体部上位	①(5.2)		外:にぶい黄褐色 内:にぶい黄褐色	2mm以下の石英・長石・ 角閃石やや多量	良好	外:不明 内:ナデ		
1号溝	8-2	弥生土器・不明 口縁部?	①(2.0)		外:灰白色 内:灰白色	1mm以下の石英・長石・ 角閃石中量	良好	外:ナデ? 内:ナデ?		
1号溝	8-3	須恵器・不明 口縁部?	①(2.6)		外:灰色 内:灰色	1mm以下の石英・長石・ 黒色砂粒少許	良好	外:ココナデ 内:ココナデ		
1号溝	8-4	須恵器・埴 口縁部	①(2.7)		外:灰白色 内:灰白色	2mm以下の石英・長石・ 黒色砂粒少量	良好	外:ココナデ 内:ココナデ		
2号溝	8-5	弥生土器・長頸壺 11線部	①(3.5)		外:にぶい黄褐色 内:にぶい黄褐色	3mm以下の石英・長石・ 褐色砂粒やや多量	良好	外:不明 内:不明		
2号溝	8-6	土師器・壺? 口縁部	①(3.9)		外:淡黄褐色 内:淡黄褐色	1mm以下の石英・長石・ 角閃石少量	良好	外:タテハケ 内:ココハケ		
2号溝	8-7	弥生土器・不明 口縁部	①(2.0)		外:にぶい黄褐色 内:にぶい黄褐色	1mm以下の石英・長石・ 角閃石(少許)	良好	外:ナデ? 内:ナデ?		
2号溝	8-8	弥生土器・壺 底部	①(3.0) ②(9.4)		外:にぶい黄褐色 内:褐色	1mm以下の石英・長石・ 角閃石中量	良好	外:ナデ? 内:ナデ?		
2号溝	8-9	弥生土器?不明 小片	①(2.5)		外:褐色 内:にぶい黄褐色	1mm以下の石英・長石・ 角閃石中量	良好	外:不明 内:不明		
3号溝	8-10	弥生土器・壺 口縁部	①(0.8)		外:灰白色 内:灰白色	1mm以下の石英・長石・ 角閃石中量	良好	外:ココナデ 内:ココナデ		
4号溝	8-11	弥生土器・壺 口縁部~体部上位	①(6.8) ②(14.6) ④体部径(12.5)		外:褐色 内:褐色	2mm以下の石英・長石・ 角閃石中量	良好	外:ココナデ/タテハケ 内:ココナデ/ナデ		
4号溝	8-12	弥生土器・壺 体部上位	①(2.7)		外:にぶい黄褐色 内:黒色	3mm以下の石英・長石・ 角閃石中量	良好	外:ココナデ/タテハケ・ナデ 内:不明		
5号溝	8-13	須恵器・壺? 頸部	①(2.7)		外:灰色 内:灰色	1mm以下の石英・黒色 砂粒微量	良好	外:ココナデ 内:ココナデ		
出土遺構	挿図 番号	器種 (残存状況)	流量(cm)		材質			製作法・使用痕		備考
			①長さ ②幅 ③厚さ							
1号溝	8-14	杭 先端部	①(11.2) ②2.4 ③1.4		木製、樹種不明			先端部にナイフ状工具による加工痕		
1号溝	8-15	杭 先端部	①(11.0) ②(1.8) ③(0.6)		木製、樹種不明			先端部にナイフ状工具による加工痕		

## 第4章 調査のまとめ

大分県と福岡県の県境を北流する山国川の downstream 東岸に形成された沖積平野は大分県内最大の平野で「沖代平野」と呼ばれ、弥生時代以降の遺跡が数多く分布する。沖代地区条里跡は中津市街地の南東部に広がる古代の条里跡で、施行は8世紀初頭にさかのぼると考えられている。その分布する範囲は南限が大宰府と宇佐八幡宮を結ぶ古代の官道、通称「勅使街道」とされており、北限はJR日豊本線に沿って東西に走る県道付近で当時は固防灘の海岸線が迫っていたようである。現在埋蔵文化財包蔵地として認定されている沖代地区条里跡の規模は東西・南北ともに約3.2kmに及んでいる。この範囲内は現在では宅地化が急速に進行しているが、古代以来の水田区画や直線的な道路が基盤目状に一部に残っている。

まず、過去の調査については第2章でも概略したとおりであるが、今回の調査区の周辺では過去数次にわたって発掘調査が実施されている。これらの調査では条里施行以前の古墳時代の集落を構成する竪穴住居跡や掘立柱建物跡の他にも水田祭祀跡などが発見されている。しかし、古代の条里に直接関わるような具体的な区画や水路等は確認されていない。

今回の調査は狭小な範囲であったが、水田層と床土の下層で検出された基盤層上面で土坑の他に多数の溝が確認された。これらの溝は複雑に交錯しながら調査区外に延びていたが、南区で検出した1号溝～7号溝の切り合い関係を整理すると次のとおりで、6号溝・7号溝が最も古く、5号溝が最も新しい遺構と考えられる。



これらのうち1号溝・2号溝・4号溝・5号溝は遺構内から弥生土器や土師器・須恵器などが出土しており、おおむね古墳時代後期の所産と考えられる。また、6号溝・7号溝は1号溝や4号溝に切られるとともに、蛇行する傾向が見られることから、古墳時代後期をさかのぼる時期の自然流路の可能性がある。今回南区で検出された1号溝～7号溝は主軸の方位が条里の地割と異なることから条里とは関係の無い前代の遺構と考えられる。次に、北区では調査区壁面の土層観察により、現在の水田面の下層にもう1面の水田面が存在することが確認された。ただし、この下層の水田の経営時期は不明である。条里の当初の施行から現在までに約1300年が経過しており、その間には部分的に水田の改修が実施されたであろう。施行当初の条里地割の復元も重要であるが、その後の変遷を究明する意味からも古い水田面の把握が今後の課題となってくる。

最後に、古代における沖代平野の景観を俯瞰しながらまとめとする。沖代地区条里跡周辺に分布する古代の主要遺跡としては、その南方に官道・相原廃寺・長者屋敷官衙遺跡などがある。官道は西海道内の中心官庁である大宰府から東方に延びる豊前路で、豊前国府を經由して宇佐八幡宮、さらに豊後国内へと進んでいる。他地方の官道と同様に豊前路も平野部では直進する傾向が顕著で、旧京都郡内でも平野の南端を東西方向に直線に延びる。この旧京都郡の景観は沖代平野における官道である勅使街道と類似している。豊前路が整備されたのは条里施行以前の7世紀第IV四半期頃と考えられるが、沖代地区条里跡はこの勅使街道を南限とするとともにその方位を基準線として地割が施行されて

いる。相原庵寺は官道の南方約500mに位置する古代寺院で、創建は条里施行前で官道の敷設に近い7世紀末と考えられている。長者屋敷官衙遺跡は官道の南方約400mに位置する豊前国下毛郡の官衙の一つで、徴収した米などの租を保管する正倉と考えられている。倉庫群が設置された時期は条里施行後の8世紀中頃とされている。郡衙の中心の政庁はまだ発見されていないが、条里の外側で官道にほど近い位置に設置されていたと推測される。このように沖代地区条里跡の南方には旧下毛郡内の重要な施設が密集しており、古代においては当地域の中心地であった。さて、今回の調査を含め過去の調査例を概観すると、少なくとも条里施行以前の古墳時代後期の6世紀後半頃までは沖代平野の広範囲に集落が点在していたことが窺われる。しかし、8世紀初頭前後の条里の区画整理に伴い、それらの集落で生活していた人々は住居の移転を余儀なくされたであろう。その移転場所が条里の施行範囲内に確保されたのか、または条里の外に求められたのか興味のある問題であるが、現状では資料不足で不明である。いずれにしても、先述した主要施設の整備に加えて条里の施行により、この時期を境にして沖代平野の景観が大きく変わったものと推測される。

#### 【参考文献】

- ・中津市教育委員会「長者屋敷遺跡」中津市文化財調査報告第26集 2001. 3. 31
- ・中津市教育委員会「大池南遺跡 沖代地区条里跡欠永地区・五唯地区 中津城本丸南西石垣(Ⅲ)」中津市文化財調査報告第34集 2004. 3. 31
- ・中津市教育委員会「沖代地区条里跡 長者屋敷官衙遺跡 定留鬼塚遺跡」中津市文化財調査報告第63集 2013. 3. 31
- ・中津市教育委員会「市場遺跡1～4次調査」中津市文化財調査報告第71集 2015. 3. 31
- ・中津市教育委員会「沖代地区条里跡43次調査」中津市文化財調査報告第74集 2016. 3. 31
- ・中津市教育委員会「沖代地区条里跡41次調査」中津市文化財調査報告第78集 2017. 3. 31
- ・中津市教育委員会「沖代地区条里跡44次調査」中津市文化財調査報告第79集 2017. 3. 31
- ・古代交通研究会編「日本古代道路事典」八木書店 2004. 5. 20

# 圖 版



(1) 沖代地区条里跡 45 次調査前全景 (北から)



(2) 沖代地区条里跡 45 次南区全景 (北から)



(1) 南区全景  
(東から)



(2) 南区北半  
(西から)



(3) 南区北半  
(東から)

(1) 1号溝  
(西から)



(2) 1号溝土層断面  
(西から)



(3) 1号溝木製杭出土状況



(4) 1号溝木質出土状況



(1) 2号溝・3号溝  
(東から)



(2) 2号溝・3号溝  
(西から)



(3) 2号溝東部  
(南から)





(1) 4号溝 (南東から)



(2) 5号溝 (南から)



(3) 2号溝～4号溝上層断面 (西から)



(4) 5号溝上層断面  
(南から)



(1) 南区南半  
(西から)



(2) 1号土坑  
(南から)



(3) 1号土坑土層断面  
(東から)

(1) 北区全景  
(西から)

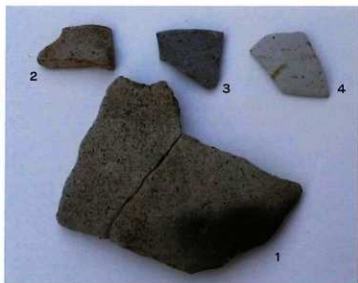


(2) 北区全景  
(南から)

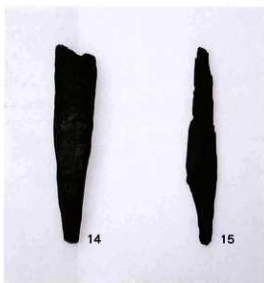


(3) 北区南壁土層断面  
(北から)





(1) 1号沟出土土器



(2) 1号沟出土木製杭



(3) 2号沟出土土器



(4) 3号沟・5号沟出土土器



(5) 4号沟出土土器

## 報 告 書 抄 録

書 名	沖代地区条里跡 45 次調査							
副 書 名	大分県中津市大字永添における集合住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻 次								
シ リ ーズ 名	中津市文化財調査報告							
シ リ ーズ 番 号	第 83 集							
編 集 者 名	末永 弥義							
編 集 機 関	中津市教育委員会							
所 在 地	〒 871-8501 大分県中津市豊田町 14 番地 3 Tel : 0979-22-1111							
発 行 年 月 日	平成 30 年 3 月 31 日							
所 収 遺 跡 名	所 在 地	市町村 コード	遺 跡 番 号	北 緯	東 経	調 査 期 間	調 査 面 積 (㎡)	調 査 原 因
沖代地区条里跡	中津市 大字永添 229 番 2 他	44203	203007	33° 34' 26"	131° 11' 47"	2017.5.15 ～ 5.30	104	宅地造成
所 収 遺 跡 名	種 別	主 な 時 代	主 な 遺 構		主 な 遺 物		特 記 事 項	
沖代地区条里跡	条 里	弥生時代 ～ 古墳時代	土坑 溝	1 基 9 条	弥生土器 土師器・須恵器 木製品他		なし	
要 約	条里施行以前の古墳時代後期を中心とした時期の溝 9 条を確認した。							

### 沖 代 地 区 条 里 跡 4 5 次 調 査

中津市文化財調査報告 第 83 集

発行日 平成 30 年 3 月 31 日

発 行 中津市教育委員会

印 刷 高橋印刷所